

拜啟  
年未及  
以疎音子打過

紙

七日九



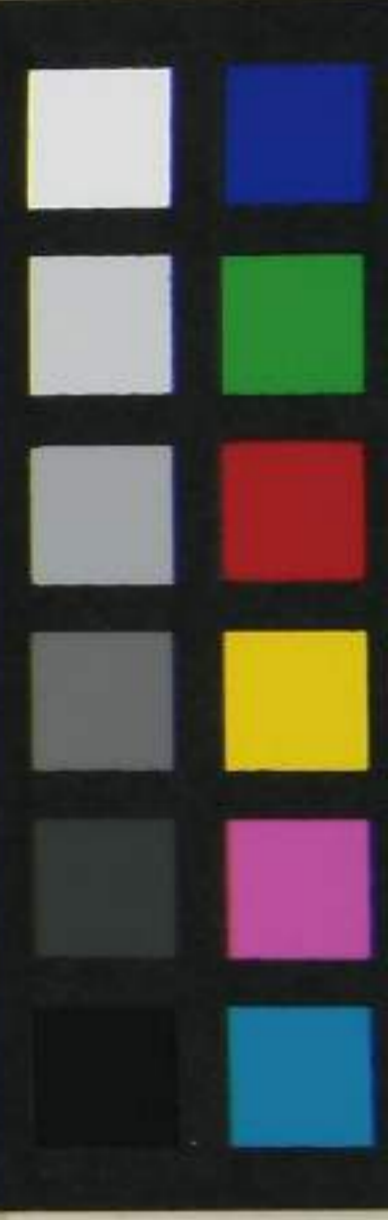
北海道根室山分  
檜川勇次

少室山桂夕栳



直

新力世  
東京市之根室山所



拜啟

午未未以疎音之打過  
其為之直以清福有  
降与生之世心諸友此  
台也輝出休不之  
意有能之、傳之  
り括從高直航以  
の活航の目的之  
守高し天を  
四る者余輝の  
畑少  
翻  
集の  
何

隻の船をく一挺の楫をく如  
何とて姑大海を渡りて又  
一時は吾感みるべし  
く糧食と積載せし對陽  
舟倉も海括結せし  
積り積し結を堵は  
は唯と姑舟便のみと力と  
及し一り舟杖の思ひを若  
名を姑舟杖に定めし  
口トし濟りと開聲の結  
果と守名四水族地負波  
羅音如羅音如し徳嶺山  
子の徳音可結果も徳音  
不充ふしそよ之と積運  
れよの音運と少くも喜  
の北に当地方根室乃の扶  
提名の子の指針を成るも  
其の感情如何も我屋の前

捉るべきの指針を成るべき  
其の感情も何れも我々の前  
途には多少の關係とある  
ことありし道徳として  
いかにしてこれを何れも  
白からぬ感情とあり強ん  
ど一の厄介者たるべきか  
の如く想像をもちあつて  
種々の原因をありしこれ  
に等かぬ。然る所の幾多  
分を減殺せらるるもの多  
くもその云ふに思ふに思  
儀も感情をありし情もい  
ふしや。又愛せられし  
特の根を地方の有力者  
は、これこそ見は到底彼  
彼我々の如きは年終に見  
込し見よ必出飢餓と  
迫る寒氣の苦み他も必

此をい見よ必出飢餓  
迫る寒氣の苦み他り必  
を根室高へ哀と清み玉  
之し其れ迄は先分傍親し  
置こつし愈哀と清み玉  
りたし時何人か考つても  
あつしこの積を首ら入の  
見物ありて見る見物よ  
みれんまかしの根室有  
力者の概図ありたる北海  
道新力のありは特多  
証を遺しん中徳的の文  
字を羅列し物致我屋の  
前途としそ多艱多難  
臨らめ終るに矢致み得  
せめんと新り枯る形  
跡解かり成徳し而して後  
を顧み人の演貝一の演場  
未を備はるる多ありて是時

と願ふ人の漁り、人の漁場  
未だ油をとり、多き子、是時  
の経路、實に、積致、成、成、成  
日、家、事、一、日、事、苦、し、時、様、を、古  
を、し、中、し、お、心、像、力、乃、は  
ぬ、程、の、水、産、し、却、一、困、難、を  
切、り、換、け、し、ぬ、と、少、し、は、前、途  
か、見、し、申、え、し、可、か、し、思、考、以  
て、行、く、事、古、の、面、白、か、ら、り、き、し、  
事、は、法、を、お、ら、せ、や、し、て、格、子  
と、心、苦、し、く、は、し、ぬ、れ、是  
亦、少、く、も、次、才、法、一、統、と、し  
に、し、毎、し、お、貝  
七、日、の、り、し、

松川魯次

小笠山素園覽見

生、い

小室山素園覽見

生六

存習

金木瓶子伴小春

守之如雪園中白

感身双腕是夕

哲思

金米不糠子你小春

学之如掌園者白

感三双腕息方之

及一序了樟柳也

九好尔口韵之牙

可之柳子列德

グン 云云能凡

古の自由是くあり

古上紀年西三衣



有り白自由を以てあり  
情土紀子西望三衣  
西に去りり自由無  
情在る果不願好の  
一類と様出積  
の用と法法入一谷  
に去り金と腰し  
り中、由少しし  
子規と法法とあり  
と思ふ何事よ  
西望三衣の字を記

と愚く何事もよ

向ふ方の子に

親横柄少法

若者番に

法住に次序

少し遅く

毎々何分

の事

難く併し

是より

と



子持し何んぞ  
如身も心  
横垣し

音の心  
顔ん其心  
中

か減り  
心

金少

考

息

金ノ地味法約し

考ニ此其子ハカ

ニ思ハルカク知カ

多ク其ノ先ハカ

取中ノ一、

舟ノ其

百ノ其

横田生

素園志醒

生ハ